# ひとうちで七匹

「週末寸言」原稿　070901

ある夏の朝のこと、「ちびっこの仕立屋」は、窓際の仕立て台の上で一心不乱に縫い物をしていました。すぐ脇にはさっきまたっぷりと塗ったばかりのジャムをたっぷりと塗ったパンがあります。これを食べるのを励みに仕上げ作業をしていると、天井にとまっていた腹を減らした無数のハエがやってきて、パンの上は真っ黒。仕立て屋さんはこれを見て癇癪を起こしました。

「待ちなさい！」

あ、これをくれてやる」と細幅のラシャの端切れをハエめがけて投げつけました。そして、この布をどけてみると、なんと7匹もハエが死んでいました。仕立て屋さんは、「いよいよ、おれさまも、こんな野郎だったのか」と我ながら自分の実力に驚きました。「町なんか、なんだい！世界中に知らせにゃならん」こう考えた仕立て屋さんは、帯を一本縫い上げて、そこに『ひとうち七匹』と縫い取りをし、それを腰に巻きつけると、意気揚々と旅に出ました。

こう始まるのは、ご存知「グリム童話集（金田鬼一訳・岩波書店）」にある「いさましいちびっこのしたてやさん」（KHM20）だ。ちびっこの仕立て屋は、「ひとうちで七匹」によって「自己を確立」するや、世界へと旅立つのだが、もとより、人生は順風満帆とはいかない。大入道や一角獣が出てきたり、意地の悪い役人が出てきたり、王宮への出仕を邪魔したり、王女を政略に使う不誠実な王様の姦計に遭ったり、仕立て屋の行く先々には数々の艱難辛苦が待ち受けている。

しかし、これら問題を知略と誤魔化しで解決した仕立て屋は、ついに王様から王様がなる王女を奪い取って自らいやがて王様になった。

河合隼雄によれば、昔話が何世紀にもわたって語り継がれてきたのは、そっくりそのまま潜んでいるからだ。ロ－の童話、真理」。

先程亡くなった心理学者のグリム兄弟やペロ－の童話、日本昔話などは、それゆえに長い時代を人々に語り継がれてきたのだ。

これらの物語の主人公ちびっこの仕立て屋は、記号論的には子供時代を象徴している。人は子供時代を獲得した成功体験を自信につなげて人生の荒波に漕ぎ出していくものだ。

そこの物語は語っていうことを、これらのものは安直に過ぎる。巡業をサ七匹ぽっちで世間に出てくるのだ。

ボ－カ－を草原でサッカ－の横綱、相撲の大関、絆創膏を顔中に張って記者会見に出てきた若い政治家、参院選に当選したものスキャンダルみたいなもの、その女子ゴルフ－の父なども、彼らもまた「ひとうちで七匹」のまま人生を始めたのではないかと疑いたくなる。